

研究紀要 第1号

不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ

—「子どもの生活に関する実態調査」と「大阪市立心和中学校の調査」から—

令和6（2024）年度

大阪市総合教育センター

不登校の実態把握と対応策の検討Ⅰ

—「子どもの生活に関する実態調査」と「大阪市立心和中学校の調査」から—

「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」の結果、頻繁な保健室利用と宿題ができていないことが不登校児童生徒に共通する特徴であることが明らかになり、養護教諭との連携や学習支援の重要性が浮き彫りとなった。

また、令和6年10月に実施した学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）である大阪市立心和中学校の調査において、6か月間の教育活動や取組を受けた前期入学者は、入学して間もない後期入学者に比べて学習時間が長く、友達関連のQOLが高いことが明らかになった。

さらに、心和中学校の生徒は大阪市内の不登校生徒と比較すると、学習状況や心情、先生との関係において異なる点がみられた。これらの結果から、心和中学校の教育活動や取組が効果を発揮している可能性がある。

【キーワード】 不登校 長期欠席 学校調査 学びの多様化学校 不登校特例校

教育振興担当

谷 口 璃 華

目次

I 「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」を用いた不登校の実態把握.....	1
1. 背景と目的.....	1
2. 方法	1
3. 結果	2
4. 考察	3
5. 結論	4
II 心和中学校における教育活動の効果検証：入学時期による比較.....	7
1. 背景と目的.....	7
2. 方法	8
3. 結果	8
4. 考察	18
5. 結論	18
III 心和中学校における教育活動の効果検証：「大阪市立心和中学校の調査」と「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」に基づく比較	19
1. 背景と目的.....	19
2. 方法	19
3. 結果	19
4. 考察	27
5. 結論	27
IV 総括および結論.....	28
引用文献	29

I 「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」を用いた不登校の実態把握

1.1. 背景と目的

大阪市における不登校児童生徒の割合は増加傾向にある¹⁾。令和5年に誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (Comfortable, Customized and Optimized Locations of learning: COCOLO プラン)の制定²⁾や学びの多様化学校 (いわゆる不登校特例校) の設置の急増³⁾など不登校支援は拡充しつつある。そのなかで、専門的な相談・指導等を受けていない現在不登校の小学生 47,034 人のうち教職員が継続的な相談・指導を行っている児童が 41,487 人 (88.2%) おり、同様に中学生では専門的な相談・指導等を受けていない中学生 83,998 人のうち教職員が継続的な相談・指導を行っている生徒が 75,919 人 (90.4%)⁴⁾いることから、教職員は不登校児童生徒にとって重要な対象といえる。また、不登校児童生徒の支援の在り方について、「不登校児童生徒が、主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、児童生徒自身を見守りつつ、不登校のきっかけや継続理由に応じて、その環境づくりのために適切な支援や働き掛けを行う必要があること⁵⁾」としている。以上より、不登校もしくは不登校傾向にある児童生徒に対する対応策を検討するため、不登校児童生徒の学校や生活上の行動の特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2. 方法

令和5年度に大阪市在住の小学5年生、中学2年生を持つ全世帯 35,895 世帯対象に行われた「子どもの生活に関する実態調査⁶⁾」を用いた。調査票は学校が配付し、学校が回収を行った。

本研究の対象者は、保護者向け調査票と小学生・中学生向け調査票の両方に回答した世帯のうち小中学生の区分、性、登校状況、社会経済的背景 (Socio-Economic Status : SES) に欠測のない世帯とした。不登校の定義は保護者向け調査票における「通学状況」において「欠席が年間 30 日以上、60 日未満である」、「欠席が年間 60 日以上、1 年未満である」、「欠席が1年以上続いている」と答えた世帯とした。不登校児童生徒の行動的特徴は学校や生活上の行動である「授業中に寝てしまうことが多い」、「宿題ができていないことが多い」、「持ち物の忘れ物が多い」、「習い事を休むことが多い」、「提出物を出すのが遅れることが多い」、「保健室で過ごすことが多い」、「学校で一人で過ごすことが多い」、「友達と遊んだり、おしゃべりする時間が少ない」を用いた。

ロジスティック回帰分析により不登校児童生徒と登校児童生徒との比較を行った。性、抑うつ傾向の有無、SES を交絡とした。抑うつ傾向については、「一人ぼっちのような気がする」、「不安な気持ちになる」、「まわりが気になる」、「やる気が起きない」、「いらいらする」の5項目のうち、いずれか一つでもあてはまるとき「抑うつ傾向あり」と区分した。SES は家庭の所得、父学歴、母学歴をそれぞれ大阪市の平均と標準偏差を用いて標準化し⁷⁾、「低SES 群」を中央値以下の世帯とした。分析結果はオッズ比 (Odds ratio: OR) と 95%信頼区間

(95% confidence interval: 95%CI) を算出した。統計解析には R を使用し、有意水準は 5%未満 (両側) とした。

1.3. 結果

調査票の回収率と解析対象者数

調査対象世帯 35,895 世帯 (小学生 18,975 世帯, 中学生 16,920 世帯) のうち、回収率は小学生こどもが 69.2% (13,124 人), 小学生保護者が 69.4% (13,174 人), 中学生こどもが 67.9% (11,488 人), 中学生保護者が 67.7% (11,460 人) であった。このうちこども・保護者のいずれかのみ回答している 10,283 世帯と、小中学生の区分・性・登校状況・社会経済背景に欠測のある 4,347 世帯を除外し、解析対象者は 21,265 世帯 (小学生 11,303 世帯, 中学生 9,962 世帯) であった。不登校児童生徒がいる世帯数は、小学生 148 世帯 (1.3%), 中学生 294 世帯 (3.0%) であった。

登校状況別にみた対象者の基本属性及び学校や生活上の行動特徴

登校状況別にみた対象者特性を表 1-1 に示す。小学生において、性と SES については、登校児童群と不登校児童群で有意な差はみられなかった。負の心情を持つ児童は、登校児童群に比べて不登校児童群が有意に多かった。学校・生活上の行動については、「宿題ができていないことが多い」、「習い事を休むことが多い」、「提出物を出すのが遅れることが多い」、「保健室で過ごすことが多い」、「学校で一人で過ごすことが多い」、「友達と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない」において、不登校児童群が登校児童群に比べて有意に高かった。中学生では、不登校生徒群は登校生徒群に比べて、女子、低い SES、負の心情ありの生徒が有意に多かった。学校・生活上の行動について表 1-2 に示す。「宿題ができていないことが多い」、「持ち物の忘れ物が多い」、「習い事を休むことが多い」、「提出物を出すのが遅れることが多い」、「保健室で過ごすことが多い」、「学校で一人で過ごすことが多い」、「友達と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない」において不登校生徒群が登校生徒群に比べて有意に高かった。

登校状況と学校や生活上の行動との関連

登校状況と学校・生活上の行動との関連について表 1-3 に示す。小学校における不登校児童に特徴的な行動は、オッズ比が大きい順に、「保健室で過ごすことが多い (OR: 5.56, 95%CI: 2.62-10.85)」、「宿題ができていないことが多い (OR: 4.12, 95%CI: 2.62-6.39)」、「習い事を休むことが多い (OR: 3.09, 95%CI: 1.63-5.47)」、「友達と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない (OR: 2.62, 95%CI: 1.40-4.64)」であった。対して、「持ち物の忘れ物が多い (OR: 0.55, 95%CI: 0.34-0.85)」は登校児童に多い行動であった。

中学校における不登校生徒に特徴的な行動は、オッズ比が大きい順に、「保健室で過ごすことが多い (OR: 5.73, 95%CI: 3.19-9.96)」、「宿題ができていないことが多い (OR: 3.94,

95%CI: 2.89-5.35)」、「習い事を休むことが多い (OR: 2.60, 95%CI: 1.89-3.57)」、「友達と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない(OR: 2.55, 95%CI: 1.64-3.86)」、「提出物を出すのが遅れることが多い (OR: 2.48, 95%CI: 1.60-3.79)」であった。対して、「持ち物の忘れ物が多い (OR:0.59, 95%CI: 0.42-0.81)」、「授業中に寝てしまうことが多い (OR: 0.52, 95%CI: 0.37-0.71)」は登校生徒に多い行動であった。

1.4. 考察

不登校児童生徒ともに「保健室で過ごすことが多い」が最も特徴的な行動であった。年間の保健室登校平均人数は、小学校 2.6 人、中学校 3.8 人と報告されている⁸。さらに、令和 2 年度に文部科学省が不登校の小学 6 年生・中学 2 年生約 2,000 人に行った「不登校児童生徒の実態調査⁹」において、最初に「行きづらい」と感じ始めたきっかけとして、小学生の 26.5%、中学生の 32.6%が身体の不調を挙げている。そのため、すでに不登校状況にある児童生徒および不登校の定義は満たさないが欠席日数が多い児童生徒に対して注目し、養護教諭と担任の連携や声掛け、養護教諭の複数配置は必要だろう。

また、不登校児童生徒ともに「宿題ができていないことが多い」が特徴的な行動にあがっていた。「令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、不登校児童生徒について把握した事実として、小学校の 14.7%、中学校の 15.3%が「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた」を挙げている⁴。令和 2 年度文部科学省の調査において「最初に学校に行きづらい、休みたいと感じ始めたときのきっかけ」として「勉強がわからない (授業がおもしろくなかった, 成績がよくなかった, テストの点がよくなかったなど)」を挙げた小学生は 29.7%、中学生は 27.6%であった。さらに、「最初のきっかけとは別の理由で、学校に行きづらくなる要因」として「勉強がわからない (授業がおもしろくなかった, 成績がよくなかった, テストの点がよくなかったなど)」を挙げた小学生が 31.4%、中学生が 41.8%であった⁹。そのため、勉強のつまずきは、不登校のきっかけのみならず不登校継続の要因でもあるため、登校状況に関わらず、学習につまずいた児童生徒の学習支援が重要だろう。

本研究の強みを二点あげる。一点目が、大阪市全域の小学 5 年生と中学 2 年生の不登校児童生徒本人を調査対象としたこと。労働政策研究・研修機構 (JILPT) が実施している「子育て世帯全国調査¹⁰」は住民基本台帳に基づいた層化二段無作為抽出かつ、子ども本人への質問は行われていない。一方で、本研究が利用した「子どもの生活に関する実態調査」は大阪市内の全小学 5 年生と中学 2 年生を対象とし、実際に不登校の状況にある児童生徒から直接データを収集している。二点目が、世帯年収および両親の学歴を指標とした社会経済背景 (SES) について調整できたこと。小学生においては SES と不登校との間に有意な関連は見られなかったが、中学生においては SES と不登校との間に有意な関連がみられた。SES が不登校と関連する強固なエビデンスはない。2004 年から 2006 年にコロンビアの小学 4 年生を対象に行われた研究¹¹では SES と不登校との間に有意な関連がみられなかったと報告さ

れている。この研究では、SES を給食費の支払い状況から評価し、給食費が減免あるいは免除されている者を低い SES と見なしていたため、SES の測定法の妥当性に問題がある可能性があった。本研究では、「全国学力・学習状況調査」に基づく学力と SES の関連性に関する既存の方法¹²を用いて SES を算出した。また、貧困が間接的に不登校と関連していること¹³や、母親の学歴が中卒であることが不登校リスクと関連している報告¹⁴に基づき、世帯年収と両親の学歴を交絡因子として調整した。これにより、本研究はより高精度な分析が行われたと考えられる。

限界を四点あげる。一点目が、本研究は横断研究であるため、因果関係について言及することはできないこと。今後、現在登校している児童生徒を経年的に追跡し、不登校の発生有無を観察する縦断調査を行う必要があるだろう。二点目が、調査票が学校に配付、学校で回収であったため、学校とのつながりがある児童生徒に限られていたこと。そのため学校とのつながりが薄い不登校児童生徒については学校・放課後の過ごし方がわからなかった。三点目が、欠席理由が不明であること。令和5年度の欠席理由別割合は小学生が病気 0.95%、不登校 1.70%、その他 0.7%、中学生が病気 1.34%、不登校 5.98%、その他 0.23%であった⁴。四点目が、登校状況が保護者による自己申告であるため実際の登校状況とは異なる可能性があること。児童生徒の出席状況を紐づけ可能な調査を実施することで正確な登校状況を踏まえた分析となるだろう。

1.5. 結論

本研究は、大阪市における不登校児童生徒の学校や生活上の行動特徴について検討した。小中学生とも頻繁な保健室利用、宿題ができていないことが特徴的な行動としてみられた。そのため、養護教諭との連携や複数配置、宿題ができていない児童生徒への声掛けや学習のつまずきがみられる児童生徒の学習支援が重要であることが考えられた。

表 1-1 登校状況別にみた対象者特性（合計 21,265 世帯）

項目	小学生 (11,303 世帯)			中学生 (9,962 世帯)		
	登校児童 (11,155 世帯)	不登校児童 (148 世帯)	<i>p</i> 値	登校生徒 (9,668 世帯)	不登校生徒 (294 世帯)	<i>p</i> 値
性_女子	5,725 (51.3)	71 (48.0)	0.47	4,882 (50.5)	170 (57.8)	0.02
SES 高低_低	5,406 (48.5)	82 (55.4)	0.11	4,644 (48.0)	174 (59.2)	<0.001
負の心情_あり	8,826 (79.1)	134 (90.5)	<0.001	8,437 (87.6)	283 (96.3)	<0.001

世帯数(%)を示す。カイ二乗検定により *p* 値を算出した。SES: Social Economic Status（社会経済的背景）

表 1-2 登校状況別にみた学校や生活上の行動（合計 21,265 世帯）

項目	小学生 (11,303 世帯)			中学生 (9,962 世帯)		
	登校児童 (11,155 世帯)	不登校児童 (148 世帯)	<i>p</i> 値	登校生徒 (9,668 世帯)	不登校生徒 (294 世帯)	<i>p</i> 値
授業中に寝てしまうことが多い_あり	334 (3.0)	6 (4.1)	0.61	1,732 (17.9)	58 (19.7)	0.47
宿題ができていないことが多い_あり	792 (7.1)	41 (27.7)	<0.001	1,147 (11.9)	122 (41.5)	<0.001
持ち物の忘れ物が多い_あり	2,150 (19.3)	34 (23.0)	0.30	1,444 (14.9)	68 (23.1)	<0.001
習い事を休むことが多い_あり	231 (2.1)	15 (10.1)	<0.001	275 (2.8)	34 (11.6)	<0.001
提出物を出すのが遅れることが多い_あり	1,443 (12.9)	38 (25.7)	<0.001	1,577 (16.3)	155 (52.7)	<0.001
保健室で過ごすことが多い_あり	90 (0.8)	12 (8.1)	<0.001	74 (0.8)	22 (7.5)	<0.001
学校で一人で過ごすことが多い_あり	533 (4.8)	17 (11.5)	<0.001	550 (5.7)	59 (20.1)	<0.001
友達と遊んだり, おしゃべりしたりする時間が少ない_あり	587 (5.3)	24 (16.2)	<0.001	581 (6.0)	54 (18.4)	<0.001

世帯数(%)を示す。カイ二乗検定により *p* 値を算出した。

表 1 - 3 登校状況と学校や生活上の行動との関連（合計 21,265 世帯）

項目	小学生 (11,303 世帯)		中学生 (9,962 世帯)	
	オッズ比	調整済みオッズ比	オッズ比	調整済みオッズ比
保健室で過ごすことが多い	10.85 [5.53-19.53]	5.56 [2.62-10.85]	10.49 [6.28-16.84]	5.73 [3.19-9.96]
宿題ができていないことが多い	5.01 [3.44-7.18]	4.12 [2.62-6.39]	5.72[4.52-7.24]	3.94 [2.89-5.35]
習い事を休むことが多い	5.33 [2.96-8.94]	3.09 [1.63-5.47]	5.27 [4.14-6.69]	2.60 [1.89-3.57]
友達と遊んだり，おしゃべりしたりする時間が少ない	3.48 [2.18-5.34]	2.62 [1.40-4.64]	4.47 [3.02-6.43]	2.55 [1.64-3.86]
提出物を出すのが遅れることが多い	2.33 [1.58-3.34]	1.37 [0.87-2.11]	4.16 [3.06-5.57]	2.48 [1.60-3.79]
学校で一人で過ごすことが多い	2.59 [1.50-4.20]	0.97 [0.61-1.18]	3.52 [2.57-4.75]	1.32 [0.92-2.23]
授業中に寝てしまうことが多い	1.37 [0.53-2.86]	0.73 [0.28-1.59]	1.71 [1.29-2.25]	0.59 [0.42-0.81]
持ち物の忘れ物が多い	1.25 [0.84-1.82]	0.55 [0.34-0.85]	1.13 [0.83-1.50]	0.52 [0.37-0.71]

性，SES，負の心情の有無を交絡として調整したオッズ比を調整済みオッズ比とした。[]内は 95%信頼区間を示す。

II 心和中学校における教育活動の効果検証：入学時期による比較

2.1. 背景と目的

大阪市立心和中学校（心和中学校）¹⁵は、令和6年4月に開校した学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）³である。対象生徒は大阪市立中学校または義務教育学校後期課程に在籍し、不登校または不登校傾向にあり、心和中学校への登校意欲がある生徒のうち、次の全ての要件を満たす者とされる。在籍校での支援に加え、教育支援センターやフリースクール等の支援を受けているものの、在籍校への登校が困難な者、心和中学校の教育課程を理解したうえで、本人、保護者ともに転入を希望する者、心和中学校で卒業まで学習を進めていくことを希望する者（心和中学校から元の在籍校への転学は原則認めない）、保護者の責任のもと、安全な登下校が可能な者、心和中学校への転入により、環境を変えることで登校が可能になると在籍校長に判断された者、教育委員会事務局により、心和中学校への転入が適当であると判定された者としている。転入時期は年間2回で、前期（4月）は2，3年生、後期（10月）は全学年が転入対象である。受入予定人数は前期が30人、後期が40人で、年間70人である。特徴的な取組として、午後の時間帯から始まる教育活動、対面授業とは別にオンラインでも配信し、オンラインでも出席認定となること、普通教科授業のTT（チームティーチング）や習熟度別学習がある。特別な教育課程を編成することで、各教科の時数削減の代わりに総合的な学習の時間数を追加し、一人一人の興味や関心に基づいた手法やアプローチにより、他者と協働しながら課題解決に向けた研究を進めている。

心和中学校における教育活動や各種取組を受けた効果を評価するために、4月から6か月間教育活動を受けた前期入学者と10月に転入したばかりの後期入学者を比較した。令和6年度の転入生徒は、前期が2年生6人、3年生20人の26人、後期が1年生9人、2年生24人、3年生7人の40人で計66人であった（表2-1）。

表2-1 令和6年度心和中学校転入・在籍数

転入時期	1年	2年	3年	合計
前期	-	6人	20人	26人
後期	9人	24人	7人	40人
合計	9人	30人	27人	66人

前期転入は2，3年生のみ。

2.2. 方法

令和6年10月に心和中学校に在籍する1年生から3年生計66人を対象に、オンライン上の自記式質問紙調査を行った。

(1) 調査内容

調査項目として、学習時間、睡眠時間、テレビゲーム時間、スマートフォン使用時間、自己肯定感、将来の夢や目標の有無、学校の楽しさ、抑うつ傾向、QOL (Quality of life: QOL) を設定した。調査項目は令和5年度に大阪府が実施した「子どもの生活に関する実態調査⁶⁾」, 「令和6年度全国学力・学習状況調査¹⁶⁾」を参考に作成した。抑うつ傾向はDSRS-C (Depression Self-Rating Scale for Children) バールソン児童用抑うつ性尺度¹⁷⁾を利用した。尺度は18項目3件法から構成され、最近一週間どんな気持ちだったかを質問する。36点満点中16点以上で抑うつ傾向と定義する。本研究の対象について、Cronbachの α 信頼係数を算出したところ、0.82となり、十分安定した尺度と考えられた。QOLはKiddo-KINDL Japanese Version¹⁸⁾を用いた。尺度は24項目あり、下位尺度は身体的健康4項目、精神的well-being4項目、自尊感情4項目、家族4項目、友達4項目、学校4項目から構成されている。合計得点を算出し、得点が高いほどQOLが高いことを意味する。本研究の対象について、Cronbachの α 信頼係数を算出したところ、0.89となり、十分安定した尺度と考えられた。

(2) 統計解析

選択肢における「している」「どちらかといえばしている」「あまりしていない」「全くしていない」のうち肯定的な回答である「している」「どちらかといえばしている」を1, 「あまりしていない」「全くしていない」を0と変換し、平均値を算出した。同様に、「ある」「どちらかといえばある」「どちらかといえばない」「ない」のうち肯定的な回答である「ある」「どちらかといえばある」を1, 「どちらかといえばない」「ない」を0とした。

Shapiro-Wilk 検定により正規性を検定し、正規分布に従う場合はt検定、正規分布に従わない場合はMann-WhitneyのU検定を行った。多重検定を繰り返すことによる多重性の問題を低減するためHolm法で補正を行った¹⁹⁾。

(3) 倫理的配慮

有識者から構成される教育シンクタンクPTで承認を得た後、学校長に承認を得て実施した。

2.3. 結果

1. 対象者特性

本研究の対象者は、1年生が5人、2年生が21人、3年生が21人の計47名、回収率は71.2%であった。性別の内訳は、男性が13人(27.7%), 女性が34人(72.3%)であった。

2. 前期入学者と後期入学者の比較

心和中学校における取組を検証するため、6か月間心和中学校の教育を受けた前期入学者18人と令和6年10月に他の中学校から転入してきた後期入学者29人との間で比較を行った。

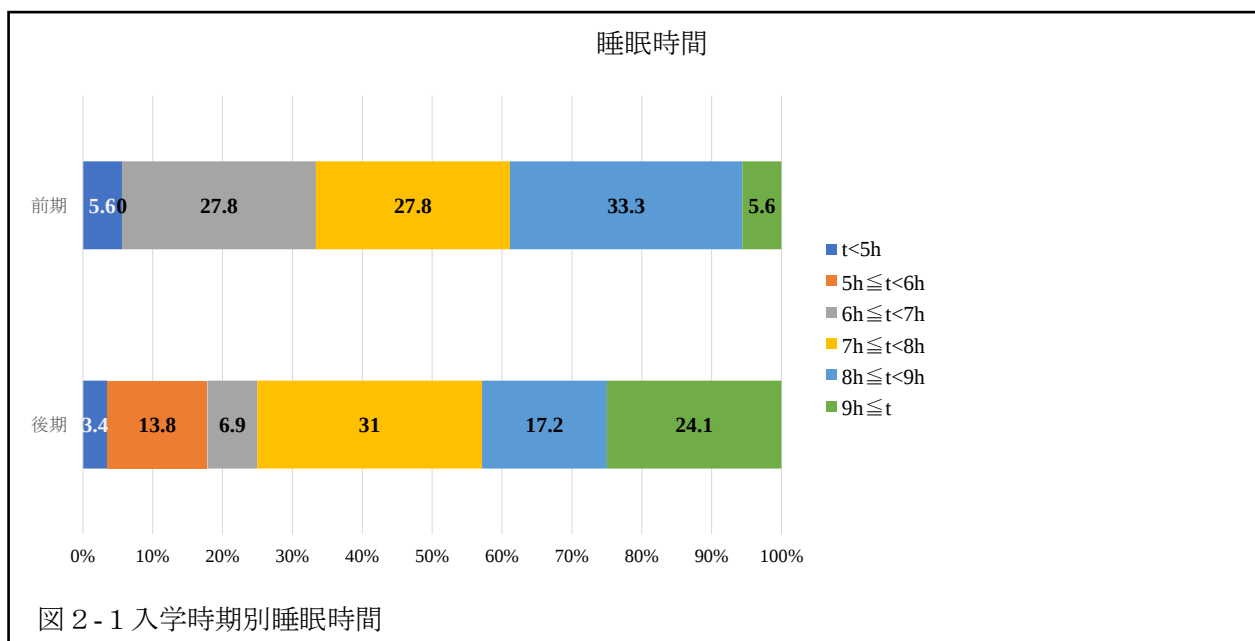
(1) 学習時間

平日の学習時間は前期入学者が 96.1 分，後期入学者が 42.8 分と前期入学者の方が後期入学者よりも長く，統計的にも有意であった ($p=0.02$)。休日の学習時間は前期入学者が 75.6 分，後期入学者が 23.5 分と前期入学者が後期入学者よりも長いが無意味ではなかった ($p=0.21$)。学習時間の変化は，前期入学者のうち 3 人 (16.7%) が減少，4 人 (22.2%) が変化なし，11 人 (61.1%) が増加したと回答している。後期入学者のうち 2 人 (6.9%) が減少，11 人 (37.9%) が変化なし，16 人 (55.2%) が増加したと回答している。学習時間が増加した者からは「学校に登校するようになった」「授業内容の予習，復習をするようになったから」「学校の授業が日々の自主学習とプラスで増えたから」等の回答が得られている。一方で，学習時間が減少した者からは「学校から帰って来たら疲れ切って，できなくなることが多くて学習時間が減った」という回答も得られた。

(2) 睡眠時間

睡眠時間が 7 時間以上の者は前期入学者が 12 人 (66.7%)，後期入学者が 21 人 (72.3%) であった (図 2-1)。「同じくらいの時刻に寝ている」において肯定的な回答である「している」，「どちらかといえばしている」と回答した者は前期入学者が 14 人 (77.8%)，後期入学者が 17 人 (58.6%) であった (図 2-2，図 2-3)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.19$ であり，有意ではなかった。

また「同じくらいの時刻に起きている」において肯定的な回答である「している」，「どちらかといえばしている」と回答した者は前期入学者が 15 人 (83.3%)，後期入学者が 22 人 (75.9%) であった (図 2-4，図 2-5)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.56$ であり，有意ではなかった。



同じくらいの時刻に寝ている

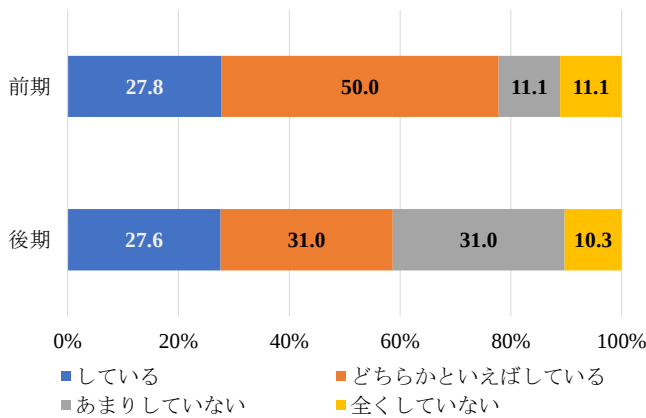


図 2-2 入学時期別同じくらいの時刻に寝ている（4 区分）

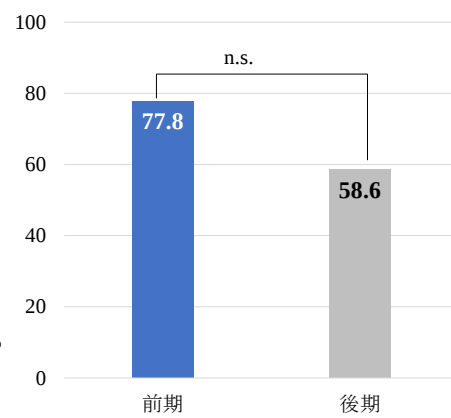


図 2-3 入学時期別同じくらいの時刻に寝ている（2 区分）

同じくらいの時刻に起きている

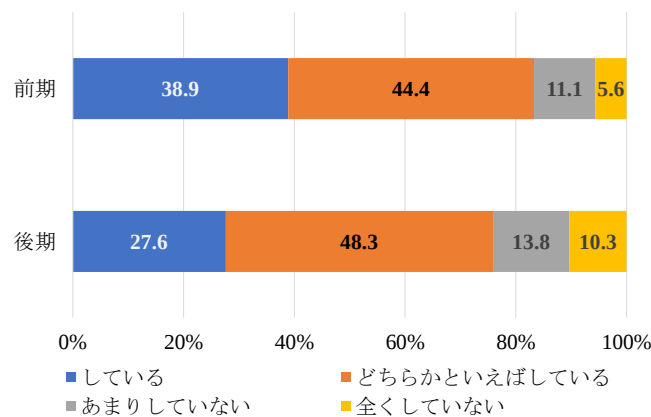


図 2-4 入学時期別同じくらいの時刻に起きている（4 区分）

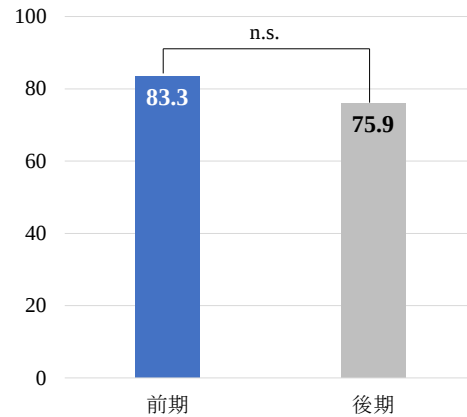


図 2-5 入学時期別同じくらいの時刻に起きている（4 区分）

(3) スクリーンタイム

テレビゲーム時間（コンピューターゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームを含む）が、一日あたり 2 時間未満の者は、前期入学者が 6 人(33.4%)、後期入学者が 9 人(31.0%)であった（図 2-6，図 2-7）。「2 時間未満のゲーム時間」と「2 時間以上のゲーム時間」を比較した p 値は $p=0.88$ であり、同傾向であった。

携帯電話やスマートフォンを用いた SNS や動画視聴時間（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）が、一日あたり 2 時間未満の者は前期入学者が 2 人（11.2%）、後期入学者が 4 人（13.7%）であった（図 2-8，図 2-9）。「2 時間未満の SNS 時間」と「2 時間以上の SNS 時間」を比較した p 値は $p=0.39$ であり有意ではなかった。

ゲーム時間

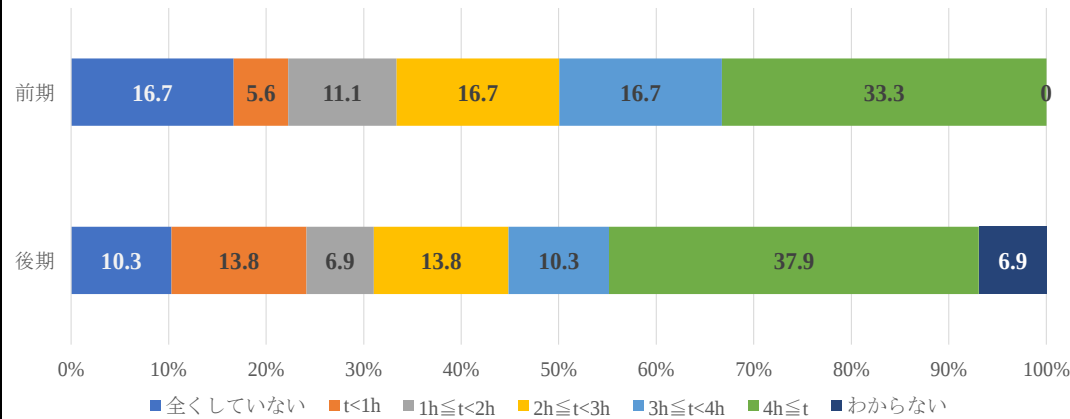


図 2-6 入学時期別ゲーム時間 (7 区分)

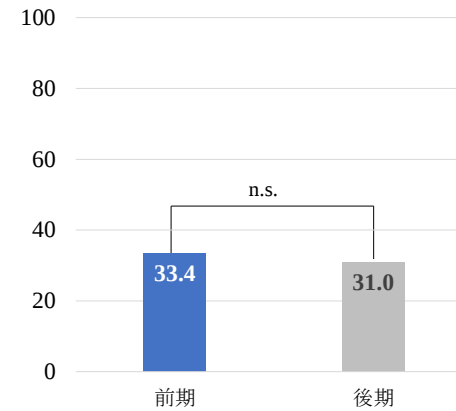


図 2-7 入学時期別 2 時間未満のゲーム時間 (2 区分)

SNS, 動画視聴時間

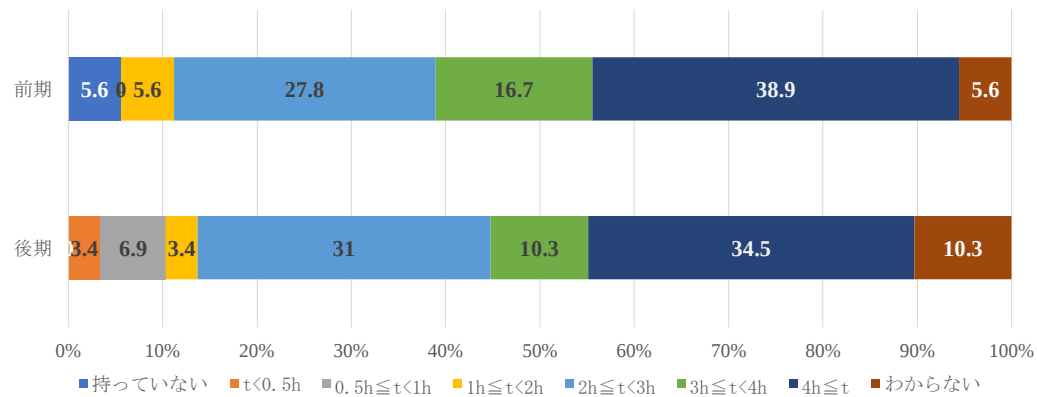


図 2-8 入学時期別 SNS, 動画視聴時間 (8 区分)

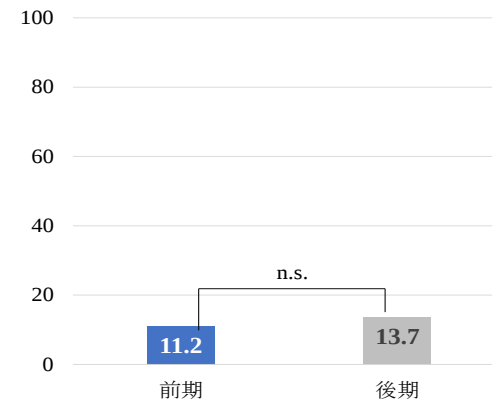
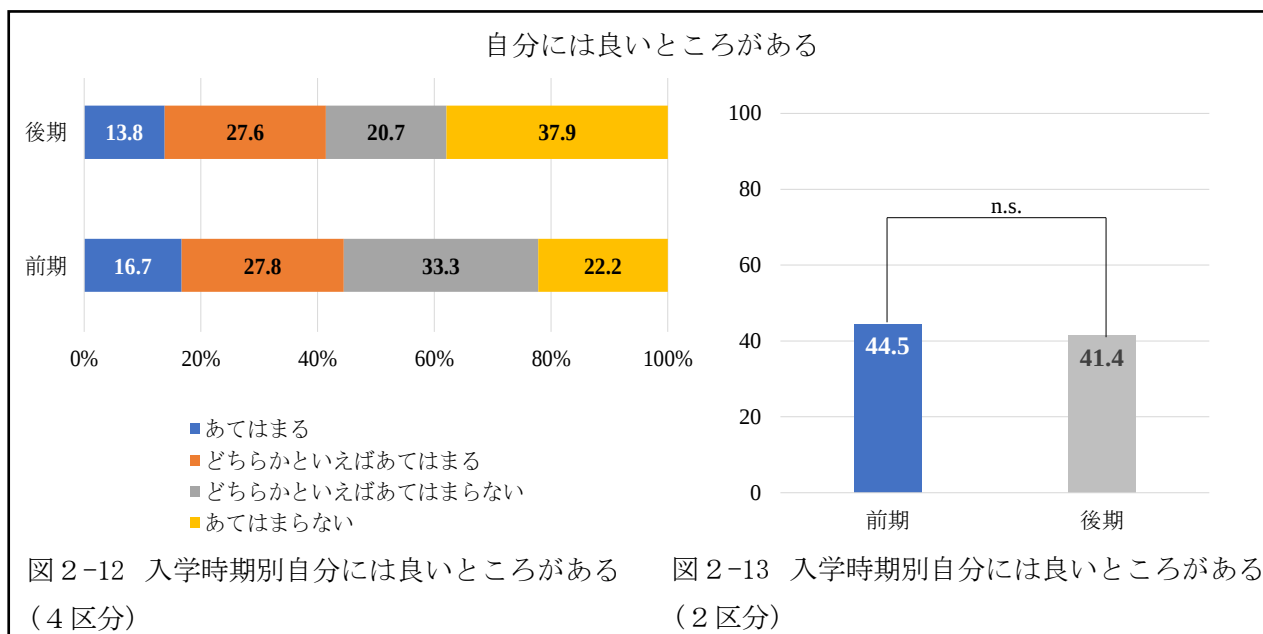
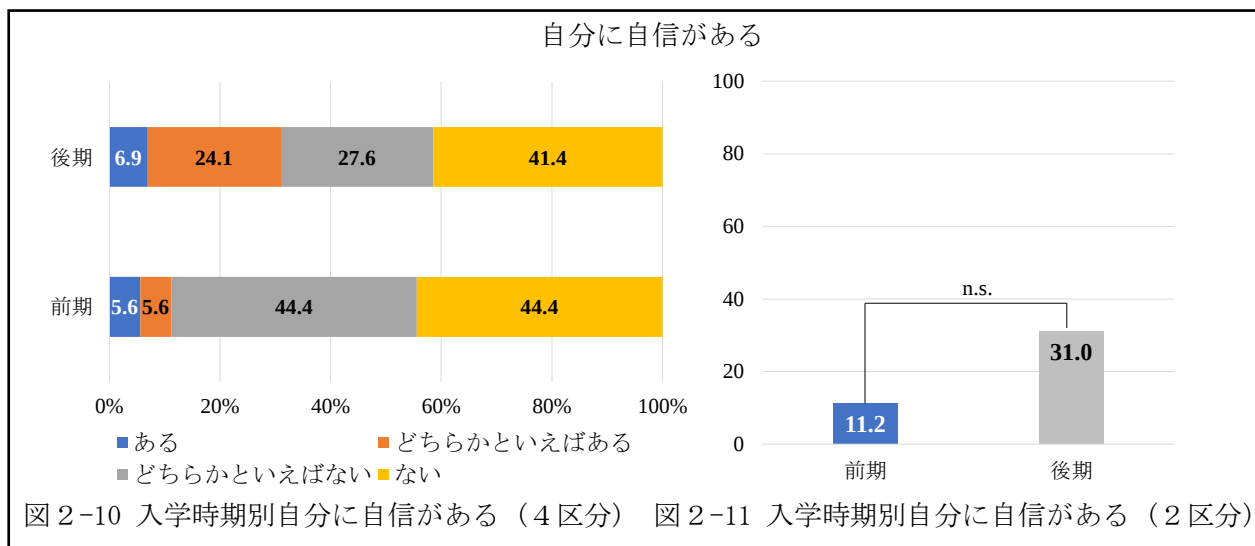


図 2-9 入学時期別 2 時間未満の SNS, 動画視聴時間 (2 区分)

(4) 自己肯定感

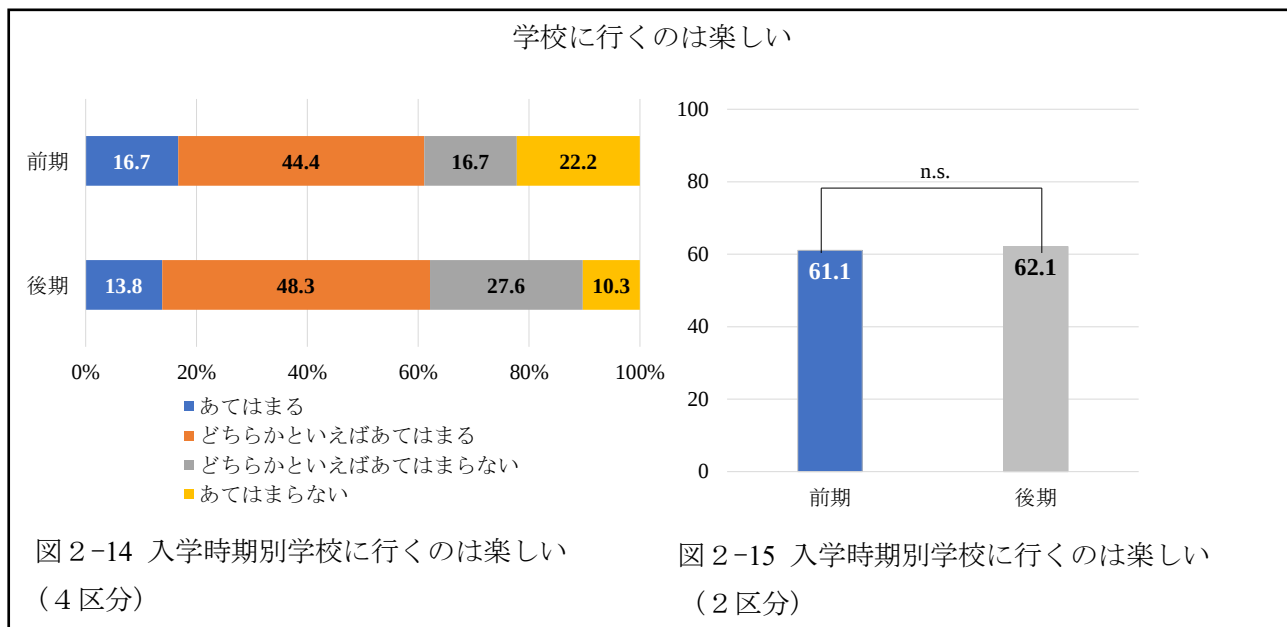
「自分に自信がある」に対して肯定的な回答である「ある」「どちらかといえばある」と回答した者は、前期入学者が2人(11.2%)、後期入学者が9人(31.0%)であった(図2-10、図2-11)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.12$ であり有意ではなかった。

「自分には良いところがある」に対して肯定的な回答である「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した者は、前期入学者が8人(44.5%)、後期入学者が12人(41.4%)であった(図2-12、図2-13)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.85$ であり、同傾向であった。



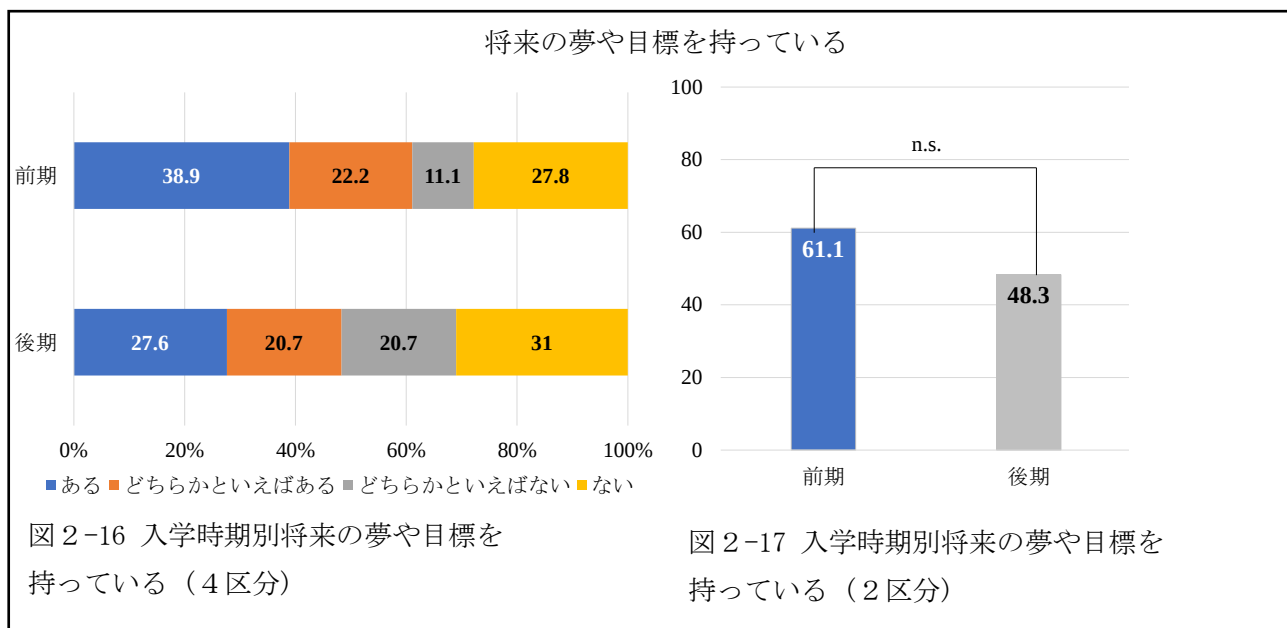
(5) 学校に行くのは楽しい

「学校に行くのは楽しいと思う」に対して肯定的な回答である「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した者は、前期入学者が 11 人 (61.1%)、後期入学者が 18 人 (62.1%)であった (図 2-14, 図 2-15)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.96$ であり、同傾向であった。



(6) 将来の夢や目標を持っている

「将来の夢や目標を持っている」に対して肯定的な回答である「ある」、「どちらかといえばある」と肯定的に回答した者は、前期入学者が 11 人 (61.1%)、後期入学者が 14 人 (48.3%) であった (図 2-16, 図 2-17)。肯定的な回答と否定的な回答を比較した p 値は $p=0.40$ であり有意ではなかった。



(7) 相談先

いやなことや悩んでいることがあるときの相談先数を図 2-18、図 2-19 に示す。平均相談先数±標準偏差は、前期入学者が 1.72 ± 1.90 人、後期入学者が 1.07 ± 1.22 人で、前期入学者と後期入学者との間に有意な差はみられなかった ($p=0.27$)。

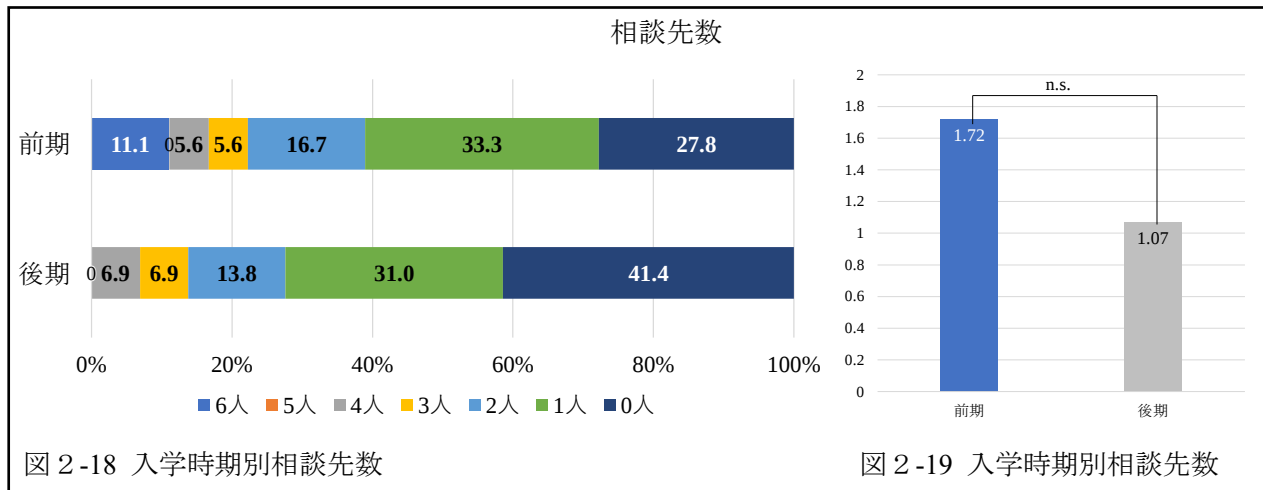
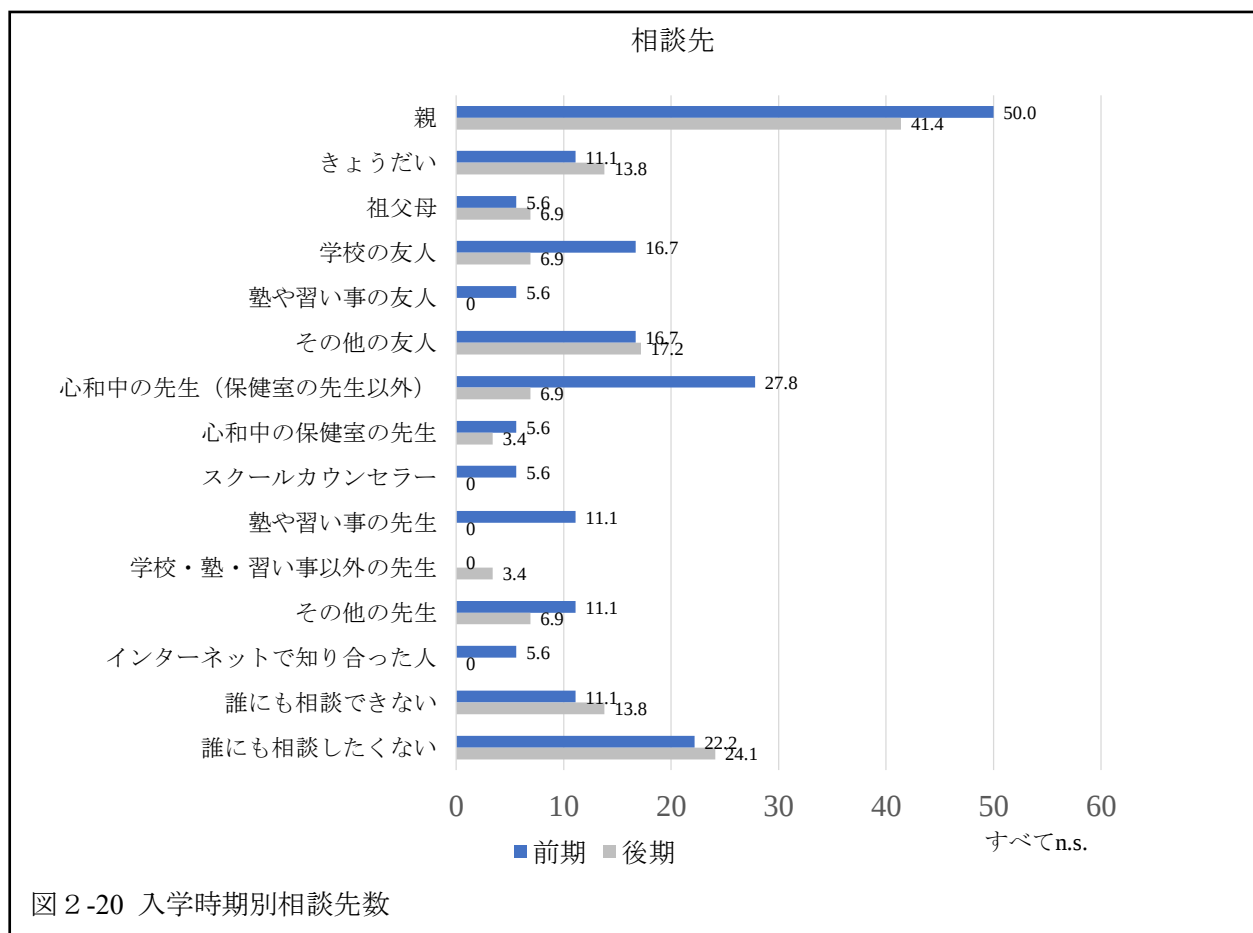


図 2-18 入学時期別相談先数

図 2-19 入学時期別相談先数

相談先について図 2-20 に示す。相談先の上位 3 つは、前期入学者が親 (50.0%)、心和中の先生 (保健室の先生以外)(27.8%)、学校の友人 (16.7%)、後期入学者が親 (41.4%)、その他の友人 (17.2%)、きょうだい (13.8%)であった。「誰にも相談できない」と回答した者が前期入学者の 11.1%、後期入学者の 13.8%であった。また「誰にも相談したくない」と回答した者が前期入学者の 22.2%、後期入学者の 24.1%であった。心和中の先生 (保健室の先生以外)を相談先とする前期入学者は 27.8%、後期入学者は 6.9%であり、 p 値は $p=0.06$ と有意傾向であった。塾や習い事の先生を相談先とする前期入学者は 11.1%、後期入学者は 0%であり、 p 値は $p=0.07$ と有意傾向であった。



(8) 心情

抑うつ傾向が 16 点以上で、抑うつ傾向ありの者は前期入学者が 9 人 (50.0%) , 後期入学者が 15 人 (51.7%)であった。中央値は前期入学者が 15.5 点, 後期入学者が 16 点, 平均値±標準偏差は前期入学者が 16.1±7.0 点, 後期入学者が 15.9±6.0 点であった。前期入学者と後期入学者の抑うつ傾向の値は同傾向であった ($p=0.94$)。QOL 合計得点について図 2-21 に示す。QOL 合計平均得点は前期入学者が 80.3 点, 後期入学者が 77.5 点 ($p=0.56$) であった。下位尺度である身体的健康関連 QOL は前期入学者が 13.7 点, 後期入学者が 14.2 点 ($p=0.78$) , 情動的 well-being 関連 QOL は前期入学者が 13.9 点, 後期入学者が 13.1 点($p=0.42$)であった, 自尊感情関連 QOL は前期入学者が 9.3 点, 後期入学者が 9.1 点 ($p=0.68$), 家族関連 QOL は前期入学者が 16.4 点, 後期入学者が 16.0 点 ($p=0.58$), 友達関連 QOL は前期入学者が 15.9 点, 後期入学者が 13.2 点 ($p=0.02$) , 学校生活関連 QOL は前期入学者が 11.1 点, 後期入学者が 11.9 点 ($p=0.28$) であった。友達関連 QOL は前期入学者の方が有意に高い傾向がみられた。

ポジティブな心情について図 2-22 に示す。「楽しみにしていることがたくさんある」の回答割合は前期入学者が 83.3%, 後期入学者が 86.2%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.80$)。「遊びに出かけるのが好きだ」の回答割合は前期入学者が 83.3%, 後期入学者は 72.4%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.40$)。「元気いっぱいだ」の回答割合は前期入学者が 83.3%, 後期入学者は 86.2%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.80$)。「やろうと思ったことがうまくできる」の回答割合は前期入学者が 66.7%, 後期入学者は 51.7%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.32$)。

ネガティブな心情について図 2-23 に示す。「ひとりぼっちな気がする」の回答割合は前期入学者が 55.6%, 後期入学者は 79.3%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.11$)。「不安な気持ちになる」の回答割合は前期入学者が 72.2%, 後期入学者は 75.9%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.93$)。「まわりが気になる」の回答割合は前期入学者が 72.2%, 後期入学者は 79.3%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.23$)。「やる気が起きない」の回答割合は前期入学者が 83.3%, 後期入学者は 86.2%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.38$)。「いらいらする」の回答割合は前期入学者が 72.2%, 後期入学者は 72.4%であり, 有意な差はみられなかった ($p=0.78$)。

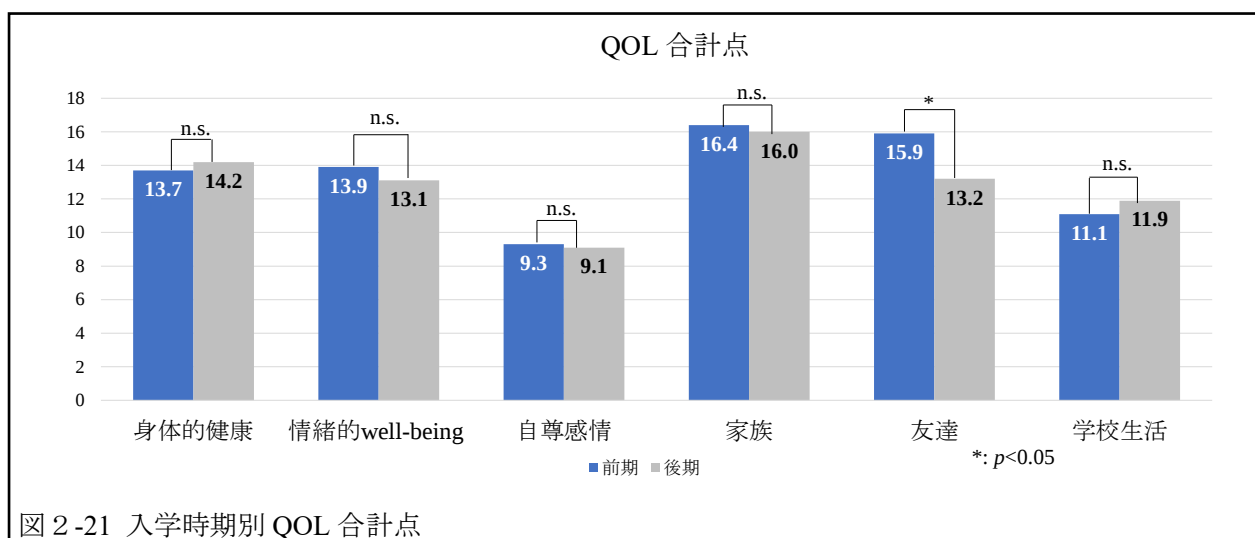


図 2-21 入学時期別 QOL 合計点

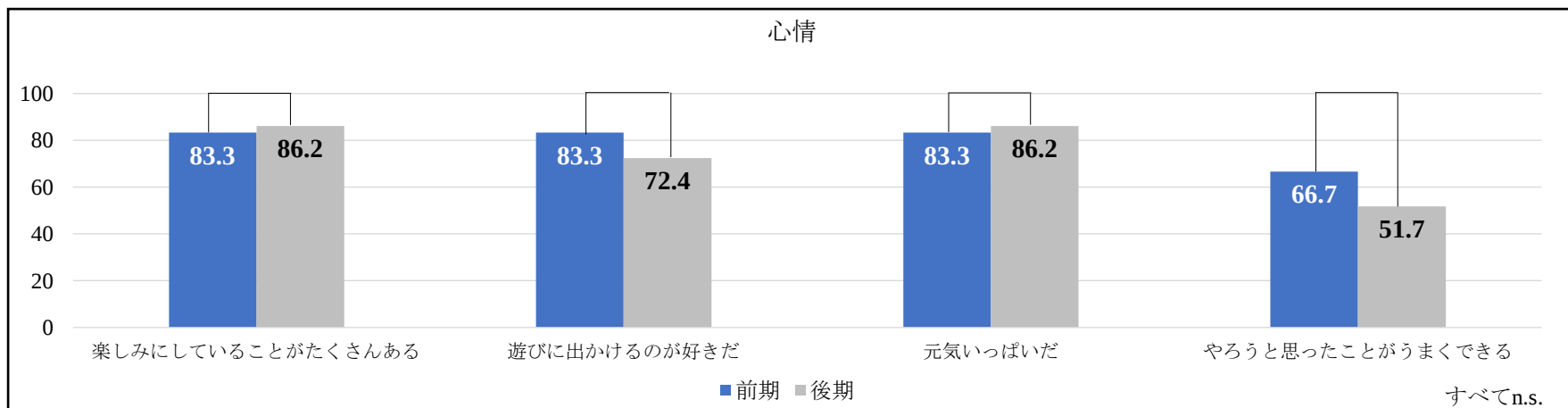


図 2-22 入学時期別ポジティブな心情

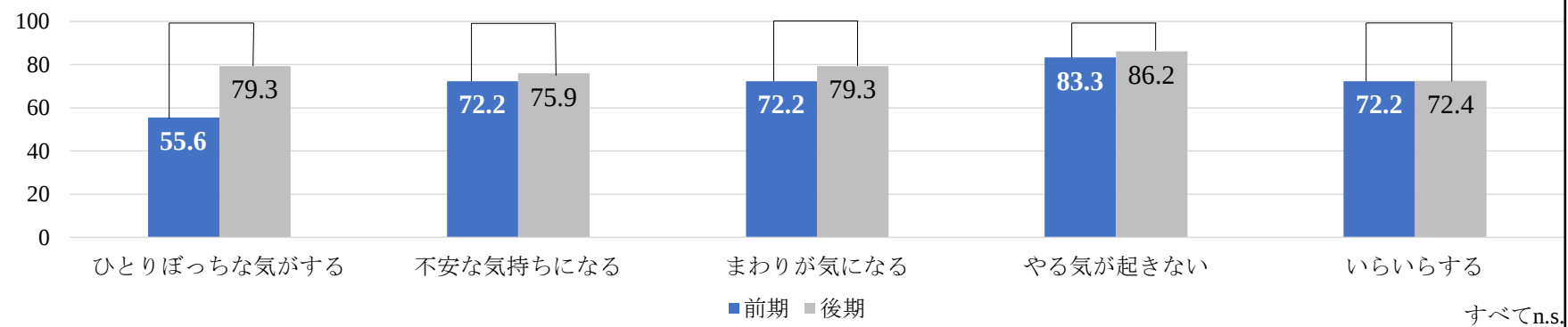


図 2-23 入学時期別ネガティブな心情

2.4. 考察

前期入学者は、後期入学者より平日の学習時間が有意に長かった。前期入学者は3年生が多く、高校受験のために学習時間が増えたことも考えられる²⁰が、目的変数を平日の学習時間、説明変数に入学時期、交絡に学年を入れた回帰分析を行っても同様の結果であったことから、心和中学校に通学するようになって学習への意識が強まった可能性がある。

相談先として「心和中学の先生（保健室の先生以外）」「心和中学の保健室の先生」「スクールカウンセラー」を挙げる生徒が前期入学者は後期入学者よりも多かった。生徒一人に対して教師一人が担当するチューター制度や令和6年度は4人のスクールカウンセラーが週5日常駐していることが相談しやすさに影響している可能性がある。

前期入学者は、友達関連 QOL が後期入学者よりも高かった。心和中学校では毎月のお誕生日会・お楽しみ会、ハロウィンパーティ、卒業生に向けたイベント OWAKARE フェス等各種イベントが設置されている²¹。同学年、異学年との交流機会が定期的に行われていることが高い友達関連 QOL となった要因であることが考えられる。

2.5. 結論

心和中学校の教育活動や取組の検証を行うために、6 か月間心和中学校で教育活動や取組を受けた前期入学者と、不登校から状況が変化したばかりの後期入学者と比較を行った。前期入学者は、後期入学者よりも平日の学習時間が有意に長く、友達関連の QOL が有意に高かった。通学するようになり生活習慣や学習習慣が変化したことや、定期的に行われる同学年・異学年との交流イベントが心和中学生の心情に変化をもたらしている可能性がある。

III 心和中学校における教育活動の効果検証：「大阪市立心和中学校の調査」と「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」に基づく比較

3.1. 背景と目的

心和中学校における教育活動や取組を評価するため、心和中学生と大阪市内の不登校生徒、登校生徒の3群比較を行った。

3.2. 方法

心和中学生は、令和6年4月に入学し心和中学校の教育を6か月間受けた前期入学者18人とした。大阪市内の不登校生徒と登校生徒については、令和5年度に大阪市内で行われた「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」に回答した者のうち、小中学生の区分と出席状況に欠測がない10,879人（不登校生徒330人、登校生徒10,549人）とした。

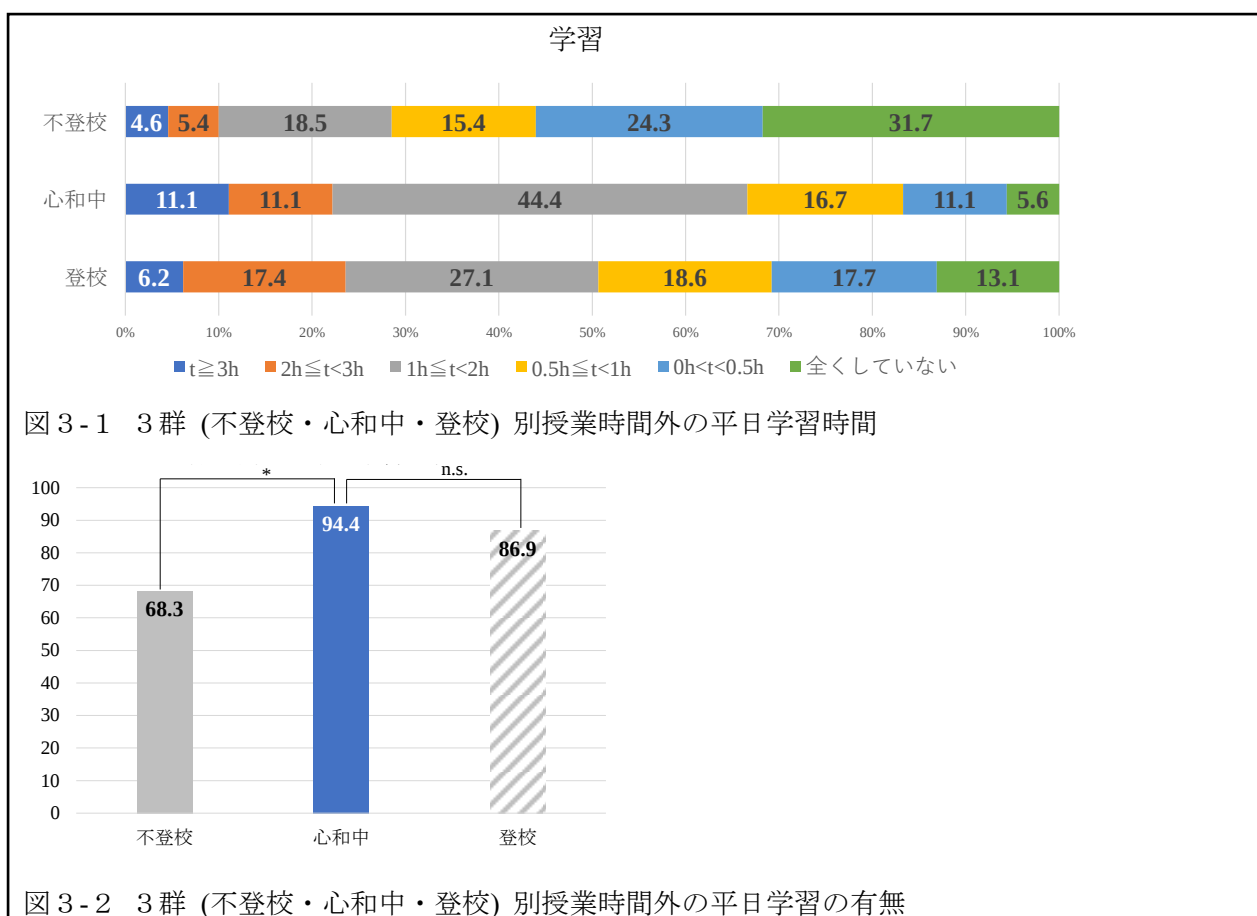
「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」において保護者用調査票上の「お子さんの通学状況について、もっとも近いもの」の項目について「欠席が年間30日以上」と回答した世帯を不登校とした。

統計解析は心情の各項目について「いつもそうだ」、「ときどきそうだ」を1、「そんなことはない」を0とし、平均値を求めた。「自分に自信がある」、「自分の将来の夢や目標を持っている」は「ある」、「どちらかというところある」を1、「どちらかというところない」、「ない」を0とし、平均値を求めた。検定はMann-WhitneyのU検定を行い、Holm法で補正を行った¹⁹。

3.3. 結果

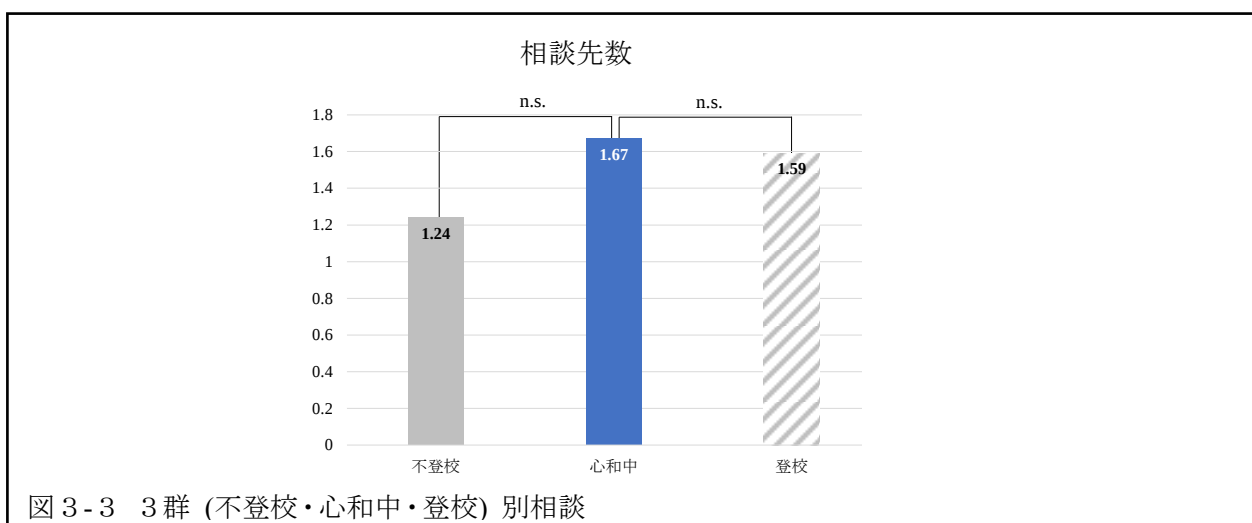
(1) 学習時間

3群（不登校・心和中・登校）別授業時間外の平日学習時間を図3-1に示す。2時間以上学習している者は登校生徒の23.6%、心和中学生22.2%、不登校生徒の10.0%の順であった。全くしていないと回答している者は、不登校生徒が31.7%、登校生徒が13.1%、心和中学生5.6%の順であった。授業時間外の平日学習をしている生徒の割合は心和中群（94.4%）>登校群（86.7%）>不登校群（68.6%）であり（図3-2）、心和中群と登校群に有意な差はなく（ $p=0.33$ ）、心和中群は不登校群より有意に多かった（ $p=0.04$ ）。



(3) 相談先

相談先数を図 3-3 に示す。いやなことや悩んでいることがあるときの平均相談先数±標準偏差は、不登校群が 1.24 ± 1.21 人、心和中群が 1.67 ± 1.78 人、登校群が 1.59 ± 1.31 人で、心和中群と不登校群、登校群との間に有意な差はみられなかった (不登校-心和中: $p=0.50$, 心和中-登校: $p=0.70$)。



いやなことや悩んでいることがあるときの相談先について図3-4に示す。親に相談している割合は、登校群 (45.4%) > 心和中群 (50.0%) > 登校群 (53.9%) の順であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=1.00$, 心和中-登校: $p=1.00$)。きょうだいに相談している割合は、登校群 (14.6%) > 心和中群 (11.1%) > 登校群 (7.2%) の順であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=1.00$, 心和中-登校: $p=1.00$)。祖父母に相談している割合は、心和中群 (5.6%) > 不登校群 (3.3%) = 登校群 (3.3%) の順であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=1.00$, 心和中-登校: $p=1.00$)。学校の友達に相談している割合は、登校群 (54.5%) > 心和中群 (28.9%) > 登校群 (26.7%) の順であり、心和中群と登校群との間に有意な差がみられた (心和中-不登校: $p=0.27$, 心和中-登校: $p<0.05$)。その他の友達に相談している割合は、心和中群 (15.4%) > 登校群 (8.2%) > 登校群 (6.1%) の順であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=0.21$, 心和中-登校: $p=0.32$)。学校の先生に相談している割合は、心和中群 (27.8%) > 登校群 (14.1%) > 不登校群 (10.3%) の順であり、有意な傾向がみられた (心和中-不登校: $p=0.07$, 心和中-登校: $p<0.10$)。スクールカウンセラーに相談している割合は、不登校群 (8.2%) > 心和中群 (5.6%) > 登校群 (1.1%) の順であり、有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=0.69$, 心和中-登校: $p=0.15$)。その他の先生に相談している割合は、登校群 (7.7%) > 不登校群 (5.1%) > 心和中群 (3.0%) の順であり、有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=0.41$, 心和中-登校: $p=0.56$)。インターネットやサイトを通じて知り合った直接会ったことのない人に相談している割合は、心和中群 (11.1%) > 不登校群 (8.4%) > 登校群 (3.0%) の順であり、心和中群と登校群との間には有意傾向であった (心和中-不登校: $p=0.70$, 心和中-登校: $p=0.09$)。その他の人に相談している割合は、登校群 (7.7%) > 心和中群 (3.3%) > 不登校群 (1.4%) の順であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=0.62$, 心和中-登校: $p=0.26$)。

いやなことや悩んでいることがあるときに「誰にも相談できない」、「誰にも相談したくない」と回答した割合について図3-5に示す。「誰にも相談できない」と回答する割合は、心和中群 (11.1%) > 不登校群 (8.8%) > 登校群 (3.9%) であり、いずれも有意な差はみられなかった (心和中-不登校: $p=0.74$, 心和中-登校: $p=0.23$)。「誰にも相談したくない」と回答する割合は、心和中群 (22.2%) > 不登校群 (11.8%) > 登校群 (8.1%) であり、心和中群と登校群との間に有意な傾向がみられた (心和中-不登校: $p=0.19$, 心和中-登校: $p=0.06$)。

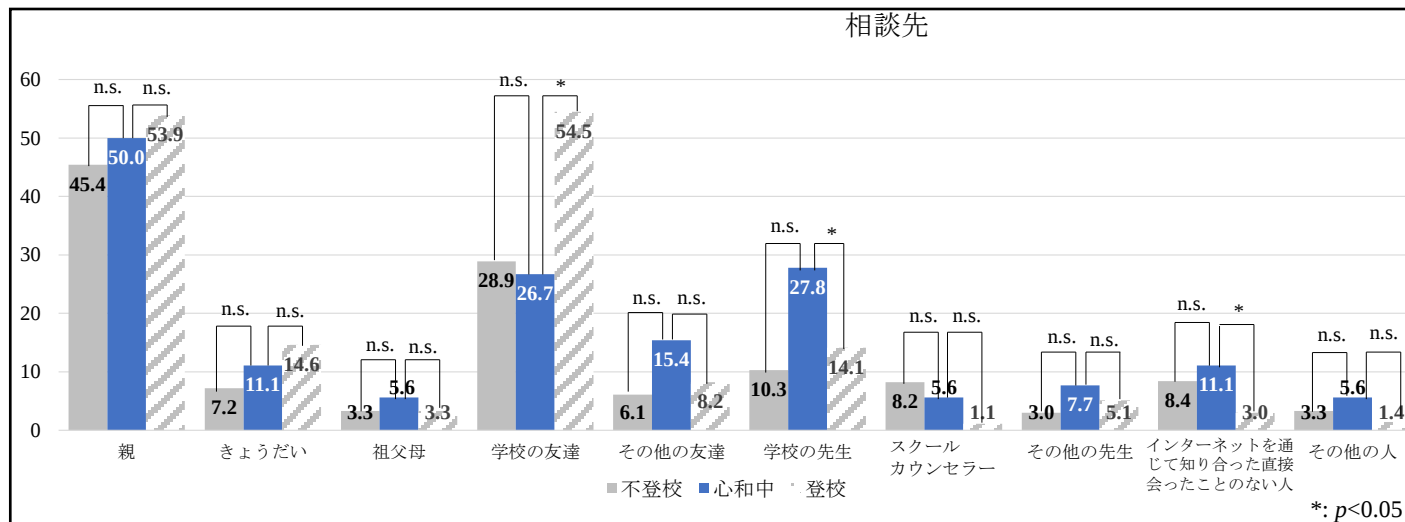


図 3-4 3 群 (不登校・心和中・登校) 別相談先

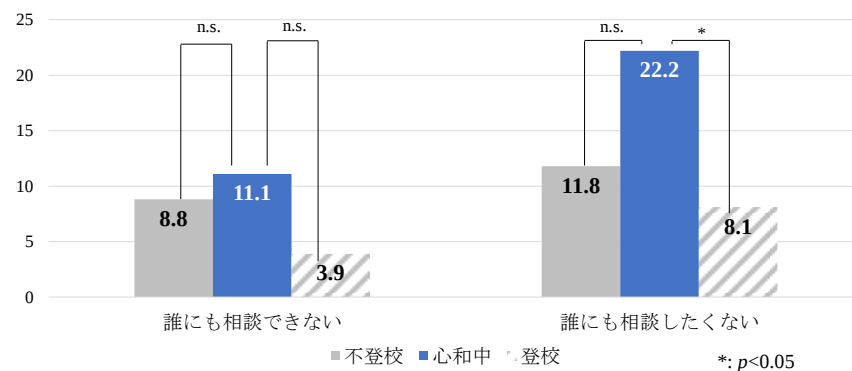


図 3-5 3 群 (不登校・心和中・登校) 別誰にも相談できない/誰にも相談したくない

(2) 心情

心情比較について示す。ポジティブな心情は「楽しみにしていることがたくさんある」、「遊びに出かけるのが好きだ」、「元気いっぱいだ」、「やろうと思ったことがうまくできる」の4種類、ネガティブな心情としては「ひとりぼっちな気がする」、「不安な気持ちになる」、「まわりが気になる」、「やる気が起きない」、「いらいらする」の5種類を「いつもそうだ」、「ときどきそうだ」、「そんなことはない」の3区分で回答を求め、結果を表3-1に示す。

さらに、「いつもそうだ」、「ときどきそうだ」を「はい」、「そんなことはない」を「いいえ」の2区分にし、心和中群、不登校群、登校群の3群比較を行った。ポジティブな心情における3群比較について図3-6に示す。「楽しみにしていることがたくさんある」の回答割合は、登校群 (92.3%) > 心和中群 (83.3%) > 不登校群 (79.3%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.68$)、登校群と心和中群 ($p=0.31$) いずれも有意な差はみられなかった。「遊びに出かけるのが好きだ」の回答割合は、登校群 (86.7%) > 心和中群 (83.3%) > 不登校群 (70.4%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.48$)、登校群と心和中群 ($p=0.67$) いずれも有意な差はみられなかった。「元気いっぱいだ」の回答割合は、登校群 (86.6%) > 心和中群 (83.3%) > 不登校群 (61.2%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.32$)、登校群と心和中群 ($p=0.47$) いずれも有意な差はみられなかった。「やろうと思ったことがうまくできる」の回答割合は、登校群 (74.1%) > 心和中群 (66.7%) > 不登校群 (49.5%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.16$)、登校群と心和中群 ($p=0.47$) いずれも有意な差はみられなかった。ネガティブな心情における3群比較について図3-7に示す。「ひとりぼっちな気がする」の回答割合は、不登校群 (63.3%) > 心和中群 (55.6%) > 登校群 (38.2%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.51$)、登校群と心和中群 ($p=0.26$) いずれも有意な差はみられなかった。「不安な気持ちになる」の回答割合は、不登校群 (78.2%) > 心和中群 (72.2%) > 登校群 (58.1%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.55$)、登校群と心和中群 ($p=0.45$) いずれも有意な差はみられなかった。「まわりが気になる」の回答割合は、不登校群 (74.8%) > 心和中群 (72.2%) > 登校群 (61.4%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.81$)、登校群と心和中群 ($p=0.70$) いずれも有意な差はみられなかった。「やる気が起きない」の回答割合は、不登校群 (89.5%) > 心和中群 (83.3%) > 登校群 (75.1%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.82$)、登校群と心和中群 ($p=0.82$) いずれも有意な差はみられなかった。「いらいらする」の回答割合は、不登校群 (72.2%) > 心和中群 (69.2%) > 登校群 (58.0%) であり、不登校群と心和中群 ($p=0.79$)、登校群と心和中群 ($p=0.44$) いずれも有意な差はみられなかった。

また、「自分に自信がある」についての比較を図3-8に示す。回答割合は登校群 (46.7%) > 不登校群 (24.5%) > 心和中群 (11.1%) であり、心和中群と不登校群との間に有意な差はみられなかったが ($p=0.20$)、心和中群と登校群との間に有意な差がみられた ($p<0.01$)。

「自分の将来の夢や目標を持っている」についての比較を図3-9に示す。回答割合は心和中群 (61.1%) > 登校群 (58.0%) > 不登校群 (50.0%) であり、心和中群と不登校群との間 ($p=0.72$) も心和中群と登校群との間 ($p=0.79$) も有意な差がみられなかった。

表3-1 3群別の心情

質問項目	不登校 (330 人)			心和中学校 (18 人)			登校 (10,549 人)		
	いつも そうだ	ときどき そうだ	そんなことは ない	いつも そうだ	ときどき そうだ	そんなことは ない	いつも そうだ	ときどき そうだ	そんなことは ない
楽しみにしていることが たくさんある	77 (23.8)	180 (55.6)	67 (20.7)	4 (22.2)	11 (61.1)	3 (16.7)	4,393 (42.2)	5,213 (50.1)	803 (7.7)
遊びに出かけるのが 好きだ	99 (30.6)	129 (39.8)	96 (29.6)	8 (44.4)	7 (38.9)	3 (16.7)	6,027 (57.9)	3,004 (28.8)	1,385 (13.3)
元気いっぱいだ	46 (14.3)	151 (46.9)	125 (38.8)	7 (38.9)	8 (44.4)	3 (16.7)	4,762 (45.8)	4,252 (40.9)	1,393 (13.4)
やろうと思ったことが うまくできる	26 (8.0)	134 (41.5)	163 (50.5)	1 (5.6)	11 (61.1)	6 (33.3)	1,723 (16.6)	5,984 (57.5)	2,691 (25.9)
ひとりぼっちな 気がする	119 (36.7)	128 (39.5)	77 (23.8)	3 (16.7)	7 (38.9)	8 (44.4)	812 (7.8)	3,162 (57.5)	6,418 (61.8)
不安な気持ちになる	114 (35.0)	141 (43.3)	71 (21.8)	7 (38.9)	6 (33.3)	5 (27.8)	1,417 (13.6)	4,621 (44.5)	4,354 (41.9)
まわりが気になる	135 (41.5)	108 (33.2)	82 (25.2)	5 (27.8)	8 (44.4)	5 (27.8)	2,271 (21.9)	4,110 (39.6)	4,002 (38.5)
やる気が起きない	157 (48.3)	134 (33.2)	34 (10.5)	6 (33.3)	9 (50.0)	3 (16.7)	2,348 (22.6)	5,458 (52.5)	2,588 (24.9)
いらいらする	71 (21.8)	154 (47.4)	100 (30.8)	2 (11.1)	11 (61.1)	5 (27.8)	1,116 (10.7)	4,912 (47.2)	4,369 (42.0)

人数(%)

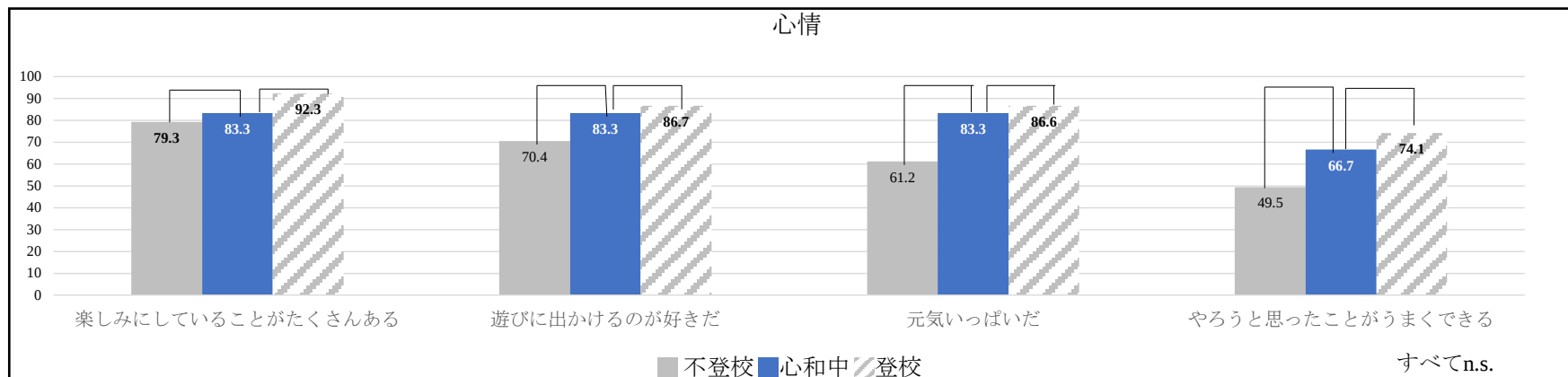


図 3-6 3群 (不登校・心和中・登校) 別ポジティブな心情

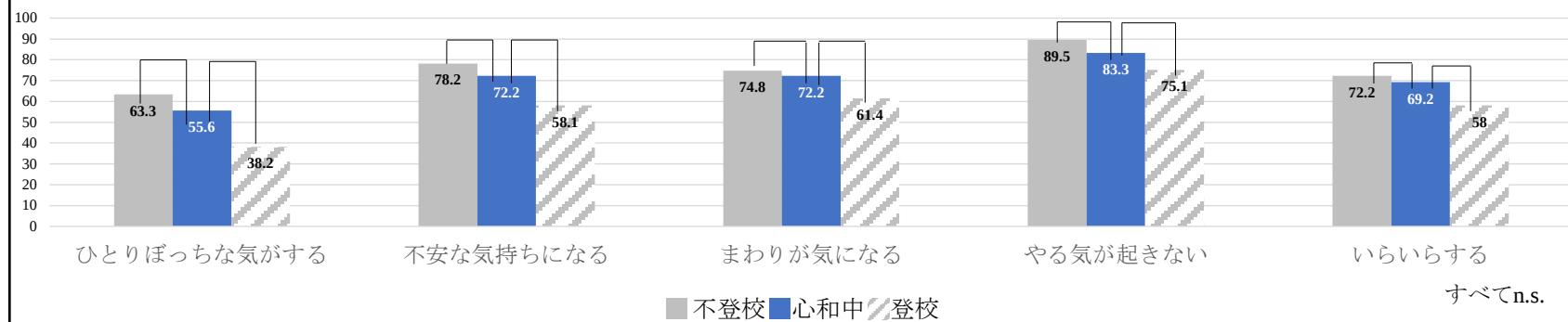


図 3-7 3群 (不登校・心和中・登校) 別ネガティブな心情

自分に自信がある/将来の夢や目標を持っている

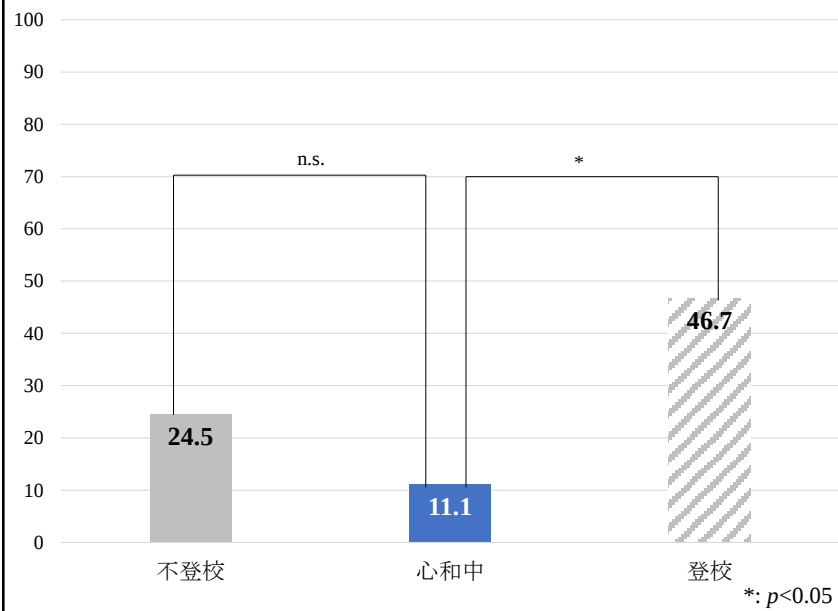


図 3-8 3 群 (不登校・心和中・登校) 別自分に自信がある

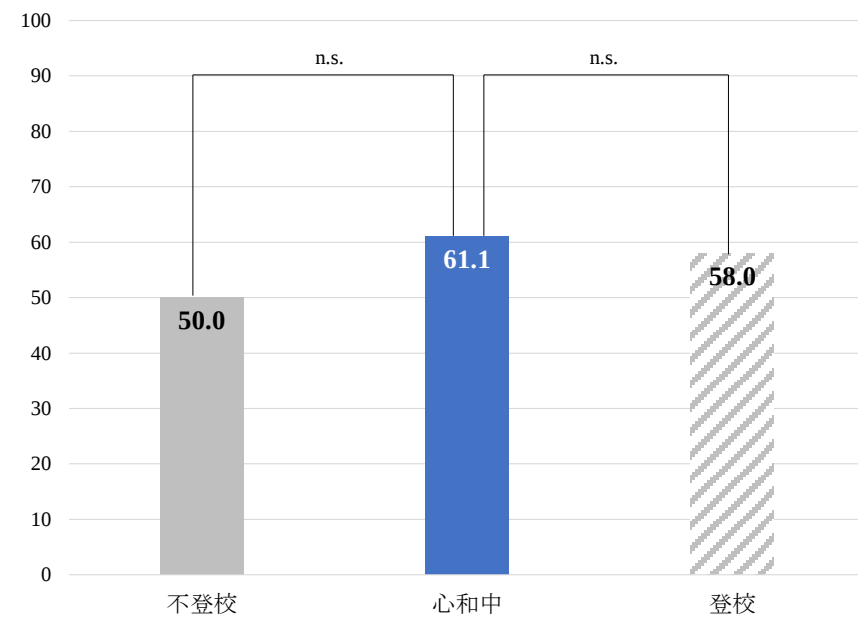


図 3-9 3 群 (不登校・心和中・登校) 別将来の夢や目標を持っている

3.4. 考察

平日に学習時間を確保している心和中中学生は登校生徒、不登校生徒よりも多かった。各学年の総授業時数が標準授業時数 1,015 時間に対して 770 時間と少なく、また学習時間に関する自由記述において「進むのが遅いから (学習時間が増えた)」,「空き時間に勉強している」とあることから主体的に自学自習するようになったことが考えられる。

「誰にも相談したくない」と考えている心和中中学生は、登校生徒より有意に多く、相談することに困難を抱える生徒が多く在籍していることが考えられる。その一方で、相談先に学校の先生を挙げている割合が高かった。これは、心和中中学が生徒一人に対して教師一人が担当するチューター制度を取っており、相談しやすい環境であることが考えられる。

心情に関する分析において、心和中中学校の生徒数が少ないことが影響を与えた可能性があり、結果に有意差は認められなかった。しかし、心和中中学生と不登校生徒との間には異なる傾向が示された。心和中中学生は不登校生徒と比較して、各種ネガティブな心情を持つ者の割合が低い傾向があり、逆に各種ポジティブな心情を持つ者の割合が高い傾向が示された。不登校はうつ状態と関連しているとされる研究²²と一致する一方で、心和中中学校における教育活動や取組が生徒の心情に変化を引き起こしたのか、あるいは、不登校生徒のなかでもポジティブな心情を持つ生徒が心和中中学校へ転入しているのかについては明らかではない。これらの点については今後さらに検討する必要がある。

3.5. 結論

心和中中学校の教育効果を検証するため、6 か月間心和中中学校で教育活動や取組を受けた前期入学者と、「令和 5 年度子どもの生活に関する実態調査」における大阪市全体の不登校生徒及び登校生徒を比較した。心和中中学生は学習をしている割合が高く、心情面に良い状況がみられた。また、「相談したくない」と考える生徒が多い一方で、困ったときの相談先として心和中中学校の先生を選ぶ生徒が多いことから、生徒一人に対して教師一人が担当するチューター制度等の取組が効果をあげている可能性がある。

IV 総括および結論

第一章では、「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」を用いて不登校状態の児童生徒の学校や生活上の行動特徴を検討した。頻繁な保健室利用と宿題ができていないことが不登校児童生徒に共通する特徴であることを明らかにした。

第二章では、学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）である大阪市立心和中学校の教育活動や取組の効果を、令和6年10月に実施した調査に基づき、前期入学者と後期入学者の比較を通じて検証した。前期入学者は、学習時間が長く、学校の先生を相談相手としており、友達関連のQOLが高いことが示された。

第三章では、第一章で用いた「令和5年度子どもの生活に関する実態調査」と第二章で用いた心和中学校の調査を用いて、心和中学校の生徒と大阪市全体の不登校生徒、登校生徒の3群で比較を行った。心和中生徒は相談したくないとの考えが多い一方で、困ったときの相談先として心和中学校の先生を選んでいることが明らかになった。また心情面でも登校生徒に近い傾向があり、不登校生徒と異なる点が示された。

以上から、不登校児童生徒の主体的な社会的自立や学校復帰のための環境づくりにおいて、保健室を頻繁に利用する児童生徒や宿題提出に遅れる児童生徒への声掛けや支援、養護教諭との連携と複数配置、学習支援等が必要と考えられる。また、勉強の自主性、学校の先生への相談のしやすさ、友達関係、心情面で効果が認められており、生徒一人に対して教師一人が担当するチューター制度等心和中学校における教育活動や取組が効果を発揮しているように考えられる。その一方で、心和中学校の活動が良い効果を与えているか、不登校生徒のなかでもポジティブな要素を持つ生徒が心和中学校へ転入したか、因果関係は明らかではないため今後の検討課題である。

最後に、本研究の調査実施及び分析においてご指導を賜った大学の関係者各位、そしてご多用の中、ご協力を頂いた心和中学校の関係者各位に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 大阪市教育委員会事務局. 令和 5 年度 大阪市立学校における暴力行為・いじめ認知・不登校数（令和 6 年 10 月 31 日）. 2024.
<https://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000638/638406/reiwa5nendoosakashiritugakkou.pdf.pdf> (参照 2025-04-28).
- 2) 文部科学省. 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLO プラン）」（令和 5 年 3 月 31 日）. 2023. https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870-cc.pdf (参照 2025-05-01).
- 3) 文部科学省. 学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）の設置者.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1387004.htm (参照 2025-03-25).
- 4) 文部科学省. 令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査.
https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf (参照 2025-04-30).
- 5) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課. 「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（令和元年 10 月 25 日）. 2018.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm (参照 2025-04-28).
- 6) 大阪市こども青少年局企画部企画課こどもの貧困対策推進グループ. 令和 5 年度 子どもの生活に関する実態調査について. 2023.
<https://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/page/0000623642.html> (参照 2025-03-31).
- 7) 西村 和雄 八木 匡, 古閑 龍太郎, 岩澤 政宗, 谷口 璃華. 学力向上と格差解消——大阪市の SES データを利用した実証分析. *Quality Education*, 2025, vol 14.
- 8) 公益財団法人日本学校保健会. 保健室利用状況に関する調査報告書令和 4 年度調査結果.
https://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook_R050070/ (参照 2025-04-23).
- 9) 文部科学省. 令和 2 年度不登校児童生徒の実態調査 結果の概要.
https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318-2.pdf (参照 2025-04-23).
- 10) 独立行政法人労働政策研究・研修機構. 子育て世帯全国調査.
<https://www.jil.go.jp/institute/chousa/kosodate-setai/index.html> (参照 2025-04-23).
- 11) Baxter S. D., Royer J. A., Hardin J. W., et al. The relationship of school absenteeism with body mass index, academic achievement, and socioeconomic status among fourth-grade children. *J Sch Health*, 2011, vol 81, pp. 417-423.
- 12) お茶の水女子大学. 平成 25 年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究. 2024.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1387004.htm.
- 13) 梶原 豪人. なぜ貧困家庭の子どもは不登校になりやすいのか. *教育社会学研究*, 2021, vol 109, pp. 51-70.
- 14) 須藤 康介. 家庭環境が子供の不登校経験に与える影響：「福祉」の問題としての不登校の実証的検討. *明星大学教育学部*, 2024, vol14, pp. 9-18.

- 15) 大阪市教育委員会事務局. 心和中中学校昼間部生徒転入案内（令和 7 年 10 月転入生）及び生徒・保護者対象説明会について, 2025.
<https://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/page/0000651391.html> (参照 2025-05-01).
- 16) 国立教育政策研究所. 令和 6 年度全国学力・学習状況調査の調査問題・正答例・解説資料について. <https://www.nier.go.jp/24chousa/24chousa.htm> (参照 2025-04-10).
- 17) 永井 智. 中学生における児童用抑うつ自己評価尺度(DSRS)の因子モデルおよび標準データの検討. 感情心理学研究 2008; 16: pp. 133-140.
- 18) 古荘 純一 柴田 玲子, 根本 芳子, 松寄 くみ子. 子どもの QOL 尺度：その理解と活用：心身の健康を評価する日本語版 KINDL[R], 2014.
- 19) 栗原 伸一. “第 9 章多重比較法” 入門統計学：検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで. オーム社, 2021, pp. 202-204.
- 20) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究. 「子どもの生活と学び」研究プロジェクト（親子パネル調査）, 子どもの生活と学びに関する親子調査 2017, 2017.
https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/detail_5279.html (参照 2025-04-23).
- 21) 大阪市立心和中中学校. 大阪市立心和中中学校, 2025. <https://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=j612329> (参照 2025-05-01).
- 22) Finning K., Ukoumunne O. C., Ford T., et al. The association between child and adolescent depression and poor attendance at school: A systematic review and meta-analysis. J Affect Disord 2019, vol. 245, pp. 928-938.

令和 6（2024）年度 研究紀要

令和 7（2025）年 7 月 1 日印刷

令和 7（2025）年 7 月 1 日発行

発行所 大阪市総合教育センター

〒543-0054 大阪市天王寺区南河堀町 4-88（みらい教育共創館内）

電話 06-6718-7467
